

「キンゼー・レポート」反映の保健教科書

ジャーナリスト 安地善太

自慰のススめ、

勃起した性器の図掲載

今年3月までの文科省の検定に合

格した中学校用の新しい教科書が来
年春から各学校で使用される。なか
でも、「保健体育」教科書は、体の仕
組み、特に性に関するかなり詳しい
情報を提供しており、思春期を迎え
る中学生に様々な影響を与えること
は否めない。

現行教科書（2005年検定済）
の中には、性機能の描写がリアル過
ぎ、問題のあるものも少なくなかつ
た。

例えば、学研の保健体育教科書は、
「性機能の成熟」の章の「射精のしく
み」の部分で、どのような生理的変
化を経て、それが起きるかを説明。
その直ぐ下にある参照資料には、男
性器が勃起した図が描かれている。
他の教科書も似たり寄ったりである。

これを示された米国の自己抑制教
育グループを束ねる団体、アブステイ
ナンス・クリアリングハウス
(abstinence・clearinghouse)のレス

リー・アンルー会長は、「これはポル
ノグラフィード」と述べている（『誰
も書かなかったアメリカの性教育事
情』世界日報社、07年刊）。

もつとも、学研の保健体育教科書
は、ほぼ同じ図を小学校3・4年生
用の「保健体育」教科書にも使用し
ている。このため、アンルー会長は、
日本の保健体育教科書について「米
国性情報・教育評議会（SIECUS、
シーカス）の影響がある」と指摘し
ている（同）。

シーカスというのは、雑誌『プレ
イボーイ』を創刊したヒュー・ヘフ
ナーが運営するプレイボーイ財団の
資金提供によって、1964年に発
足したコンドーム教育を熱心に推進
する団体だ。「結婚まで純潔を保つべ
き」との理念を掲げる自己抑制教育
団体と、教育方針をめぐって真っ向
から対立している。

ヒュー・ヘフナーが影響を受けた
のがアルフレッド・キンゼーによる
「キンゼー・レポート」だ。米国では
1970年代から幼児への性的虐待
が社会問題として浮上。米国は、

50年代までは、キリスト教倫理が
力を持っていたが、戦後しばらくし
て発刊された「キンゼー・レポート」
の影響を受け始め、ピューリタンの
性倫理が崩れていった。

「キンゼー・レポート」は、子供は
生まれつき性的であり、潜在的にオ
ルガスム能力を持っており、近親相
姦（そうかん）、大人との性交は有益
である——などと述べていた。これ
は、多くの性犯罪者や売春婦らをサ
ンプルとする偏向したものだだったが、
同レポートが米国人の隠された性の
実態であるかのように錯覚。考え方
が混乱し、米国は、60年から70
年代にかけて、悲惨な性革命の猛威に
晒されたのである。

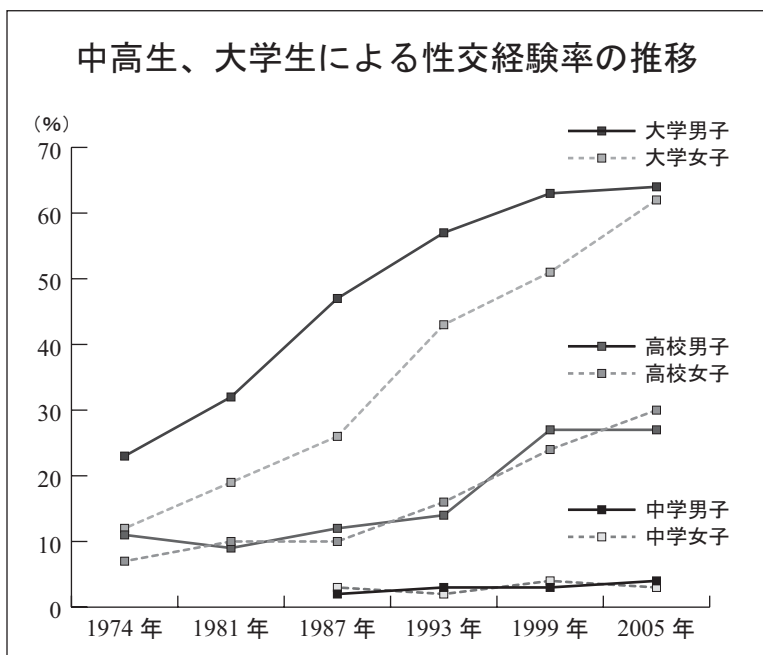
わが国で、こうした「キンゼー・
レポート」の流れをくむ団体が、
82年にできた「人間と性」教育研究
協議会（性教協）だ。シーカスの会
員だった山本直英氏（2000年没）
が設立したもので、90年代、わが
国の性教育に多大な影響を与えた。
（財）日本性教育協会の6年毎の調
査をみても、中高生は、1970

年代から80年代にかけては性行動
の活発化とも呼ぶべき現象はみら
れなかった。しかし、1990年代
に入って、高校生の性交経験の大福
な上昇が見られる。中高生を中心
とした性行動の活発化、すなわち性
行動の低年齢化は、1990年代以
降に生じており、性教協の活動やそ
の影響を受けた保険教科書の登場と
の間の因果関係が見て取れる。（図参
照）。

さて、今回、新保健体育の教科書
を作成したのは、学研、東京書籍、
大日本図書、大修館書店だ。こうし
た流れをくむ過激な性教育への批判
が自民党や一部のメディアで起こつ
たが、その批判を受けてか、中学の
新保険体育教科書は、多少、掲載す
る性器の描写が穏当になったといえ
る。

東京書籍は、相変わらず勃起した
男性器の図を載せているが、学研の
教科書は勃起した形でなくなってい
る。大日本図書も同じように変更し
ており、新たに参入した大修館書店
の図も同様である。

中高生、大学生による性交経験率の推移



出典：(財) 日本性教育協会

また、学研の現行教科書は、「射精には次のようなものがあります」とし、夢精と並んで自慰について説明。「マスターベーション、オナニーとも呼びます。自分の性器を刺激して快感を得ることです」と記述。

こうした記述と勃起した図が掲載された教科書で、男女が保健体育の授業を受けるのは、性に対する自然な慎ましさを破壊することになり、極めて不適切である。保健体育とい

「精子は、毎日たくさんつくられるようですが、射精されないか」という質問に対して、「自慰のことで悩む人も多いようですが、健康に過ごせるなら、その有無や回数で悩む必要はありません」などと記述している。これは、性教育の主張と全く同じである。

説明の前半にある「射精されずに体内にたまった精子は分解されて体に吸収されます。『たまったら出せな

うことで、生理的を重視した記述になりがちだが、結婚まで純潔を保つことの重要性と、それがエイズや性感染症、および今、問題になっている子宮頸がんを完全に予防できる。その点を力説する教育こそ必要である。

学研の新教科書では、自慰の説明文は削除されている。しかし、現行版と同じくQ&Aコーナーを作り、

「『性』を『もの』として扱っているものも多く見られます」と警告。

そのうえで、「こうした情報に惑わされて誤った行動をして、心身ともにきずついでしまうことや、犯罪に巻き込まれてしまうこともあります」と述べている。

この説明は、妥当な内容である。ただ、最後は「氾濫する情報の中から正しいものを選択し、十分に理解したうえで行動を選択する必要があります。また、その行動によってどのような結果が起こるのかを予測し、自分の考えをしっかり持った責任ある行動をとることが大切です」と結論。

一見、もっともそうな説明だが、「性

の自己決定」を支持し、結婚前の青少年が状況によっては性行為をする選択肢もあることを示唆するものだ。携帯電話の発達で援助交際など、簡単に与える環境になっている。中学生の立場では、責任を取れないのは明白であり、はっきりと「性行為をすべきではない」と書くべきである。

現行教科書の記載内容が余りにひどいため、多少、改善された印象を与えるが、教科書の内容が、子供たちに与える影響は大きい。今後もしっかりウオッチし、必要に応じて批判していく必要がある。

2011年8月発行

Pure Love Alliance – Japan



PLA-Japan 事務局

〒160-0022
東京都新宿区新宿5-13-2 成約ビル4F
Tel:03-5366-0190 FAX:050-3488-2386
Email: info@plajapan.org
URL: http://www.plajapan.org/